

On Weak-Phases : An Extension of Feature- Inheritance

大塚, 知昇

<http://hdl.handle.net/2324/1500467>

出版情報 : Kyushu University, 2014, 博士 (文学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)



論文題目

On Weak-Phases: An Extension of Feature-Inheritance

(弱フェイズに関する考察：素性継承の拡張)

氏名 大塚 知昇

論文内容の要旨

On Weak-Phases: An Extension of Feature-Inheritance

本論文は、生成文法のミニマリストプログラムにおけるフェイズ理論の理論的問題点を指摘し、解決することにより、英語をはじめとする諸言語における一致と移動に関わる現象がうまく説明できることを実証した研究である。

生成文法は、現在ミニマリストプログラムと呼ばれる研究戦略に至り、人間のもつ言語機能の本質を見極め人間言語における普遍文法の特徴を解明するという目標のもと、様々な発展を遂げている。特に2000年代から現在にいたるまで研究されている、文の派生をフェイズという単位ごとに分割するフェイズ理論のもと、更なる理論的、説明的進展が得られている。しかしながら、Chomsky (2007, 2008, 2013)で提案されている素性継承に基づいたフェイズ理論には、Chomsky (2001)で議論され、その後議論がなされていない弱フェイズに関して、理論的な問題がある。本論文ではこの問題点を「弱フェイズの矛盾」と名付け、Chomsky (2008)が提案した素性継承を拡張した「素性転写」の枠組みのもと、その解決策を示した。また素性転写の枠組みは、弱フェイズの矛盾を解決できるだけでなく、現行のミニマリストプログラムで導くことが困難な概念である「選択性」を、独立した二つの経済性の観点から導くことができるという利点を有している。従って本論文は、弱フェイズに関する諸言語の現象の説明に加え、この選択性に基づき、日本語、英語に見られる選択的な文法現象の説明の可能性を提案するものである。

本論文の1章は導入であり、本研究が現在の理論的枠組みにおいて占める位置づけを概説した。2章では、本研究の理論的背景である素性照合、フェイズ理論、解釈不可能素性と素性継承、A/A バー移動の概念を概観した。その後3章では、本論文の主要な問題となる弱フェイズの矛盾とその解決策を提示している。具体的には、まず、2章で導入した理論的背景のもとでは、伝統的に弱フェイズとして分析される vP が、A/A バー移動に関してフェイズであるとも非フェイズであるとも分析できないという矛盾点を指摘し、独自の弱フェイズの概念の想定が必要であることを論じた。その後、この矛盾点が先行研究で解決されていないことを見るために、Chomsky (2001)とRichards (2012)の分析を概観し、その問題点を指摘した。その後、通常フェイズである強フェイズの主要部から弱フェイズの主要部への活性化操作の想定によりこの矛盾が解決されることを示し、その活性化操作として、現行の素性継承を拡張した素性転写という操作を提案

した。また、素性転写を想定すると、二種類の経済性、すなわち転送領域の広さと転送操作の回数に関する経済性が拮抗するという観点から、「同時的派生」と「個別的派生」という二種類の派生の可能性が導かれることを示し、従来の格付与分析を修正して転送操作のもとにとらえ直した独自の格付与分析と組み合わせることにより、これらの派生の可能性が様々な選択的な文法現象の説明に用いられることを示唆した。

4章以降は、素性転写の枠組みのもと、これまで説明が困難であった様々な文法現象を実際に説明することにより、素性転写理論の経験的支持を示した。まず4章では、動詞句に関する、弱フェイズが関わっていると見られる諸現象を概観し、そこでの問題点を解決した。具体的には、スカンディナビア言語に見られる屈折と移動の関係性、Chomsky (2001)が指摘した英語のTh/Exと呼ばれる現象、日本語のヲ格/ガ格交替とそのスコープ解釈に関わる現象、英語の二重目的語構文における操作の可否に関わる現象を説明した。引き続き5章では、ある種の埋め込み文は弱フェイズCPであると提案し、節における弱フェイズの説明的可能性を追求した。まず、英語のアイルランド方言のECM構文に見られる特異な遊離数量詞の振る舞いは、現在主流となっているTP補部分析では説明できないが、弱フェイズCPの想定のもとでは容易にとらえられることを示した。またその後、日本語の目的語繰り上げ構文におけるガ格/ヲ格交替の説明を行い、最後に西フラマン語に見られる補文標識一致という、現行の素性継承理論では問題を引き起こすとされた現象を説明した。6章では、前置詞句における弱フェイズの想定のもと、現象の説明を試みた。この章では、ミニマリストプログラム最新の理論である「ラベリングアルゴリズム」が、本論文の弱フェイズの枠組みのもとでどのような帰結を導くのかを探求し、伝統的に様々な議論がなされつつも、いまだ適切に説明されていない「付加詞の島」を、これらの理論的枠組みから説明することができることを示した。また具体的な現象としては、英語の左方移動における前置詞残置/随伴の選択性、右方移動における前置詞残置の不可能性を説明した。最後に、本章で想定として用いた「語彙的端索性」という概念が、意味役割付与に関して一つの理論的可能性を導くことを示した。最終章である7章では、これらの議論を総括し、素性転写の想定がChomsky (2007, 2008, 2013)の素性継承理論の問題点を解決するだけでなく、選択的文法現象の説明を通じ、素性継承に基づくフェイズ理論に更なる説明力を与え、理論的な発展に貢献できることを示した。